

自動幽霊販売機



古市卓也

加藤麻依子・絵

まただ、とぼくは思った。またあそこにある。

それは、電柱のそばに立っている自動販売機だった。見るのはいつも塾の帰りで、もう暗くなっているのに、路地の角を曲がったとたん、ディスプレイの明かりがいやでも目に入ってくる。前を通りすぎるときは決まって胸がどきどきするし、次の角を曲がるまでは急ぎ足のままふりかえることもできない。白くまばゆい蛍光灯の光が、ちらっと見ただけでも読み間違えようのない大きな文字を、内がわからくつきり照らしている。

自動幽霊販売機。

しかし、そのすぐ下には、幽霊とは何の関係もない、美しいアルプスと湖の写真がはめこまれている。初めて見たときから、ぼくはそれが駅前にあるタバコの自動販売機とおなじものだと気づいていた。違うのは、見本のタバコがならんでいるべきところをおおうようにして、例の文字がならんでいることだけだった。自動幽霊販売機。おざなりな作りの、安っぽいインチキだ。だが、ひとつ不思議なのは、あつかっている商品さながら、その販売機があらわれたり消えたりすることだった。もともとその場所には自動販売機などなかったし、昼間は一度も見たことはないのだが、塾の帰りにかぎって、ひとり歩くぼくのふいをつくように、そいつは姿をあらわすのだ。見たのは今日で四度目。ぼく以外に見たことのある者はおらず、ぼくだけにあらわ